■ 総合文化研究所年報　第18号（2011）pp. 195–196

研究動向

プロジェクト　青山学院女子短期大学における女子高等教育

── 宗教教育と教養教育と女子教育 ──

加納 孝代

私たちは本プロジェクトを2年の予定で2009年度にスタートさせた。メンバーは一般教育科目のシェロ・マイク准教授、英文学科の梅垣千尋准教授、家政学科の鈴木すゞ江教授、そして代表者の英文学科教授の加納孝代の4名である。プロジェクトの目的は、2010年で創立60年を迎える青山学院女子短期大学における高等教育の特徴を明らかにすることにある。私たちは本学の特徴を、宗教教育と教養教育と女子教育という3つのキーワードを手掛かりとして、学長や学科主任など、その時々の基本的な教育方針の立案と実行の責任者の立場にあった人々の考えを明らかにするところから研究を始めた。

第1年目には講演会を3回、研究会を5回開催したほか、インタビューも行った。7月18日の講演会では本学の元学長の幸田三郎先生から、本学がその創設に際して教育の基本理念をどのように具体化しようとしたかの話を聞いた。この講演会において、とくに印象的であったのは、高等教育機関としての大学の使命は、1に、学問研究の発展に寄与すべきこと、2に、学生をしっかり育てるべきこと、3にその成果をもって社会に奉仕すべきこと、だという指摘であった。そしてその3は大学が2の使命にきちんと取り組むことで実現できる。なぜなら卒業生が職場においてであれ、家庭においてであれ、社会人として責任を果たしていくことが、大学の社会に対する貢献にほかならないからだと説明された。そして本学では学生をしっかり育てるために様々な努力と工夫がつみ重ねられてきたことも知ることができた。また幸田先生は当初国文学科、家政学科、英文学科の3学科構成だった本学に、児童教育学科と教養学科が加わった際に、主導的役割を果たされた先生だが、それらの学科に込められた、より広い人間教育への理念についても話をうかがうことができた。

10月1日の研究会では、青山学院大学名誉教授の気賀健生先生から話を聞いた。先生は、学院大学と比較してみると本学の教育内容が「実学」的ではないという顕著な特徴をもっていると指摘された。それをうかがって、本学の標榜する「教養教育」は「非実学」性と密接にかかわっているという重要な視点を得ることができた。

2010年の2月18日には本学名誉教授で、元芸術学科主任の田島俊雄先生の話を聞いた。田島先生は本学における芸術学科の創設とその後の20年の教育において中心的役割を担われた方である。芸術作品を製作する現場に実際に立つこと、あるいはそうした製作者と日常的に接したり交わったりする場が、主としていわゆる「机上」の議論が行われることの多い大学にとっていかに重要であるか、ということを話された。表面上の効用や有用性をひととき離れて、それらと無関係に見える芸術や哲学に向き合うことは、人間を育てることを究極の目的とする大学

にとって、きわめて大切な営みであるということを理解することができた。

3月25日には創設時からずっと教養学科に関わってこられた足立康先生から話をうかがった。教養学科が本学に加わったことで、人文・自然・社会研究を総合的に把握する視点がより強く意識されたことと、それが本学における学びの範囲を広げる役割を持ったことがはっきりとみえてきた。それと合わせて、2年間の短期大学生活の中での1年半を少人数の「ゼミ」にあてるという授業の形が、教育的にはきわめて魅力的かつ有効な方法として、最初に教養学科で実現されたということも知った。

元学長をされた島崎通夫先生にはこちらからインタビューにうかがい、先生の「人間教育」と「教養教育」に対する深い思いと揺るがぬ信念をうかがった。

上述の研究会や講演会などのほかに、本プロジェクトのメンバーがそれぞれ一回ずつ自分の研究の進捗状況について発表し、メンバー間で討論する場も設けることができた。

2年目の2010年度は、主として本学の卒業生で、卒業後、本学の職員として勤務したり、今も現役で学院の各部署で働いている人々に、それぞれ3名から5名ほどのグループでインタビューに応じてもらっている。趣旨は、本学の掲げた教育理念で育った人びとが、その後母校という職場環境のなかで、どのように卒業後の自分を生かしていこうとしているか、その歩みに関心があるからである。そうした集まりをすでに2010年度には6月、7月、9月と3回設けた。今年度中にさらに数回行う予定である。また本学の同窓会の役員をしている人びとも、明白に本学の教育の成果を具現している人々の代表であると見ることができる。そうした人々へのインタビューやアンケートも年度内にあと数回行おうとしている。

以上行った研究活動は基本的にメンバー全員が関わって進めてきたものであるが、企画と取りまとめは主としてプロジェクト代表の加納が担当している。それ以外にメンバー個人で進めている研究がある。家政学科の鈴木すゞ江教授は、6学科がそろっている本学のなかから、とくに家政学科のカリキュラムで育った学生たちに焦点を当てて、彼らの卒業後の足取りをインタビューという形で追うことにより、家政学科が積み上げてきた教育の具体的な成果を明らかにしようとしている。

一般教育科目のシェロ・マイク准教授は、本学の宗教教育に関して、歴史的実態と、その背後にあるヴィジョンや姿勢を、文献やインタビューやアンケートを通じて探っている。氏の研究と調査は、宗教教育を担う側（大学）とそれを受ける側（学生）の双方をともに視野に入れようとしている。また時間軸では、現実にその活動の場に存在している時点と、しばらく時間が経って、当時を振り返るところに立っている時点の双方を視野に入れようとしている。またシェロ氏は、本学の姉妹校であるアメリカのカレッジ・オブ・ノートルダム・オブ・メリーランドとの親しい交流を活用して、本学と共通する教育理念に基づいて宗教教育を行っている同校の実態を調査し、それとの比較を通して、本学の宗教教育の特徴を明らかにしようとしている。

英文学科の梅垣千尋准教授は、英国における女性のための高等教育の歴史をたどることにより、とりわけ19世紀後半から20世紀にかけて、英国における女子教育にいかに多能な視点や実践形態があったかを明らかにしようとしている。そしてそれを日本における女子のための高等教育、とくに本学およびその前身である戦前の青山女学院における教育と比較することで、本学の女子教育、すなわち女子の能力向上と社会における地位向上、男女の平等性の実現をめざす教育の特徴を把握しようとしている。